

“但馬牛”今昔物語

兵庫県立但馬牧場公園「但馬牛博物館」

館長 渡邊 大直

第20回「肉用牛としての但馬牛改良の足跡」(1)

人工授精の普及と役肉用牛から肉用牛への変貌は、牛を飼う目的や改良など但馬牛の生産構造を根底から変えるほど大きな影響を及ぼしました。

図1に兵庫県における肉用牛飼育の推移を示します。

1960年、肉用牛飼育農家は103千戸余りありました。統計に用いられていますので“肉用牛飼育農家”としましたが、当時は農耕用に牛を飼っている農家が大半で、むしろ“役肉用牛飼育農家”とするべきかも知れません。

事実、1971年の肉用牛飼育農家戸数は24,800戸となり、僅か10年ほどで、戸数は1/4弱にまで激減し、肉用牛頭数も112千頭から43,900頭と4割弱にまで減りました。そしてこの時期は耕運機が普及した時期でもあり、大部分が農耕目的で飼われていた結果でもあります。

しかし1972年以降、頭数は増加に転じ、規模拡大が進み始めました。これは肉用牛生産を目的に牛を飼う農家に絞られ、但馬牛が肉用牛となったことの表れといえるのでしょうか。

一方、家畜改良増殖法が施行された1950年頃から兵庫県は人工授精を奨励し、液状精液による人工授精が普及し始めました。

兵庫県と全国和牛登録協会兵庫県支部が毎年発行していた供用種雄牛名簿を辿ると、当時の状況を垣間見ることができます。これを基に集計した地域別の種雄牛繋養頭数の推移を図2に示します。

液状精液の時代、精液は日持ちしないので、繁殖雌牛がいる地域で種雄牛を飼い、定期的に精液を採取して、雌牛が発情すると獣医師や人工授精師がオートバイで運び、授精していたといえます。

1955年、県下で142頭の種雄牛が使われていました。いずれも但馬牛で、ほとんど県有(128頭)ですが、国有(3頭)や畜連有(11頭)の種雄牛もありました。これらの種雄牛は地域の農家(94頭)や家畜保健衛生所(13頭)、畜連の人工授精所等(31頭)で管理されていました。

阪神、播磨、多紀郡、淡路の一部で自然交配(16頭)していたところも残っていましたが、人工授精の体制が整ってきたことにより、1956年から各地の種雄牛を種畜場の本場(姫路)、但馬分場、淡路分場に移し、徐々に集中管理を進めました。

1968年からは順次凍結精液に切り替え、1972年には全て凍結精液となり、最後まで残っていた『茂金波』を美方郡畜連から種畜場に移し、種雄牛の集中管理体制ができあがりました。

また、この間に種雄牛の産肉能力検定を導入しました。

兵庫県では1964年に直接検定を試験的に導入し、1965年に『田安土井』を使って間接検定の確立試験を行いました。そして1968年には全国和牛登録協会が産肉能力検定法を定めて登録制度に組み入れ、種雄牛は直接検定と間接検定によって選抜されるようになりました。

これによって1955年に142頭いた種雄牛は、1973年には27頭と少数精鋭化が図られ、産肉能力の高い種雄牛で効率的に改良できるようになりました。

このように1970年代初頭以降、但馬牛は肉用牛として飼育され、それまで蔓牛造成などの影響もあつてか、どちらかと云えば母系が改良の中心に置かれがちであったのが、種雄牛が改良の中核を担うようになっていきました。

図1 兵庫県における肉用牛飼育の推移

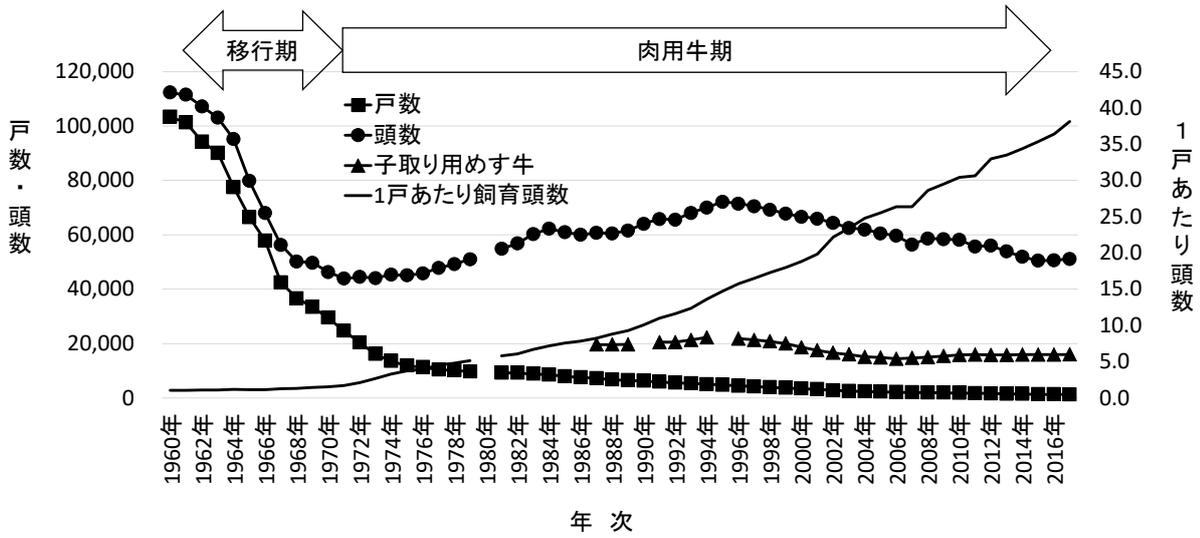


図2 地域別種雄牛繋養頭数の推移

